



# 朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

# 感謝の心で生きる

昨年12月に当山第二世顕修院日達上人の第十三回忌御報恩法要を厳修させていただきました。

昭和37年6月7日に御開山上人が御遷化され、日達上人は32歳の若さで、すべての役職を引き継がれました。法音寺住職、日本福祉大学理事長・学長、付属高校校長、昭徳会理事長、駒方保育園園長等です。その中でも大学の経営は非常に大変でした。

大学は開学当初から、経営が火の車のような状態でした。御開山上人が忘年会の席上、「大学の経営も火の車ですが、火の車というのは、回るのが不思議ですな」と冗談を言うほかないほど、本当に大変な状況でした。その理由は、予定していた国からの補助金がなかったから



です。当時の日本は自衛隊の前身である警察予備隊を創設することにあり、それに予算が割かれることで、当時の厚生省は大学（当時は短大）への補助金支給ができません。となってしまったのです。

また、御開山上人は優秀な先生を集めるために国立大学並みの給料を保証し、更に研究費も充分に出し、貧しい中にあるても志の高い学生に来てもらいたいと、学費を国立大学並みに低額にし、学生寮もつくりました。ですから支出は多く、収入は少ない状況で、非常に経営が厳しかったのです。そのような状況の中、日達上人が大学の理事長・学長を継がれた時、当時のお寺の総代さんから「御開山上人は『大学の経営が本当に大変だったから、外部の方にやってもらってもいい』とおっしゃっていましたよ」と言われたそうです。それに対して日達上人はニコっとして「なんとかなりますよ」と言われたそ



うです。

日達上人は法灯を継承された年に大荒行に入行されました。そこへ総代さん達が面会に来られて、「山首さま、今年はどうにか大学のことで銀行から借金をせずに済みました」と言われたそうです。日達上人が「それは良かったです。経営が好転したのですか？」と聞かれると、「違います。御前さま（御開山上人）が亡くなられて、皆さまでから香典を戴いて、それでどうにか銀行から借金をせずに済んだのです」ということでした。

その後、日達上人の不惜身命の精進と多くの皆さんの御助力によって借金は完済され、経営も順調に軌道に乗ったということです。

日達上人が御法話で、皆さん御存知の一休和尚の話を書かれたことがあります。

一休和尚の晩年に応仁の乱という京の都を焼き尽くす



大乱たいらんが起おこりました。これは十年ねんも続つづき、一休和尚いっしゅうおしょうのいた大徳寺だいたくじも焼やけ落おちてしまいました。応仁おうにんの乱らんの後あと、一休和尚いっしゅうおしょうやお弟子でしさん、信者しんじやさん達のたち尽力じんりきよで大徳寺だいたくじは復興ふっこうしたのですが、その後ご、一休和尚いっしゅうおしょうは「また応仁おうにんの乱らんのよようなことがないとも限かぎらない。その時ときのための心構こころがまえをを書かき置おきしておくから、もしそういうことがあつたら、この文庫ぶんこを開あけて読よむように」とお弟子でしさん達たちに言いい残のこして亡なくなりました。

一休和尚いっしゅうおしょうが亡なくなった後あと、お弟子でしさん達たちは書かき置おきを見みたくて仕方しかたがなかつたため、別べつに何なにか起おこつたわけではないのですが、その書かき置おきを見みてしまいました。そこには「なんとかなる」とだけ書かいてあつたということことです。

その御法話ごほうわを聞きいた後あと、日達上人にったつしやうにんに「おもしろい話はなですすね」と申もうし上げると、日達上人にったつしやうにんは「本当ほんとうだぞ」と言いわ



れました。それに対し、「あれは実話なのですか？」と聞き返しますと、「いや、違う。一休さんのことだから頓知話の類いだろう。しかし『なんとかなる』というのは本当だ。あきらめなければなんとかなるものだ」と言われました。その言葉の裏には大学経営の体験があったと思います。

パナソニックの創業者、松下幸之助さんが言われています。

「失敗の原因は、成功する前にあきらめてしまうことだ」  
ホンダの創業者、本田宗一郎さんも言われています。  
「私は失敗したことがない。成功するまであきらめないからだ」

歴史上の人物で、あきらめることを知らなかった偉大な人物がいます。発明王トーマス・エジソンです。エジ



ソンは、白熱電球のフィラメントを発明するまでに一万回失敗しています。紙、人間の髪の毛、近所のおじさんの髭など、思いあたるありとあらゆるものを使い、たり着いたのが竹でした。最初は200時間位明かりが灯ったそうです。そこで、自分の部下達に世界中の竹を集めさせました。その中で日本の京都の竹が一番良くて、1200時間も明かりが灯り続けたそうです。そして京都の竹を輸入して白熱電球を売り出したのです。

余談ですが、今や掃除機の代名詞と言えば「ダイソン」です。これを発明したジェームズ・ダイソンさんもサイクロン式掃除機を完成させるまでに5126回失敗したそうです。ダイソンさんの尊敬する人物は本田宗一郎さんだそうです。

ある人がエジソンに「そんなに失敗して、もう止めた方がいいんじゃないか」と言うと、エジソンは「いや、



失敗は発見であり、小さな成功なんだ。最後に大きな発見、大成功が待っているんだ」と答えました。この考え方はエジソンのお母さんの教育の賜なのです。

幼少期のエジソンは変わった子どもでした。小学校の先生が「1たす1は2です」というと、「先生、1たす1は1になることもあります」と粘土をもってきてペタッとくっつけて「この通り、1たす1は1になりました」とやったのです。先生は怒って「もう学校に来なくていい」と言ったそうです。するとエジソンは大喜びで家に帰って実験を繰り返し、お母さんが先生の代わりにエジソンを教育しました。ある時のことです。ガチョウの卵を巣から取って来てエジソンは自分で巣を作り、親鳥と同じように自分のお尻で温めました。当然孵化しません。通りがかった人達はバカにしましたが、お母さんは違っていました。「良かったね。あなたのお尻では孵化



しないことがわかったのは大発見ね！」と言ったのです。エジソンはどんな失敗も一つの発見なんだとお母さんに教えられたのです。

日達上人に話を戻します。日達上人がニコツとして、「大丈夫ですよ。なんとかなりますよ」と信者さんに言われた時のあの感じが私は好きでした。皆さん、日達上人に言われると、本当に大丈夫だと感じ、なんとかなる気がされたと思いますし、そうなのではないでしょうか。あの雰囲気は日達上人ならではのものだったなと、今、思います。

私が大学浪人をしていた頃のことです。日達上人は早稲田大学卒業で、私も早稲田大学を志望していました。当時「早稲田模試」という模擬試験があり、それを受け



たところ、「人事を尽くして天命を待て」という結果でした。つまり、ほとんど可能性がないから、もう神頼みしかないという事です。日達上人にその結果を見せると、「大丈夫だ」と言われました。私が「大丈夫ですか？受かりますか？」と聞くと、「いやそうじゃない。受かっても落ちても人生に大した影響はないから大丈夫なんだ」と言われ、そんなものかなと思っただのを覚えています。日達上人らしい言葉です。その言葉で気が楽になったのか、合格することができました。

これも余談ですが、浪人時代に入江塾を主催しておられた入江伸さんの本を何冊も読みました。入江塾は超スパルタ式で生徒が半泣きで授業を受けている姿をテレビで見ることがあります。しかし、それに耐え抜いた生徒は、灘やラサールといった超一流校に受かるのです。タ



レントのラサール石井さんがある週刊誌に入江伸さんのことを書いていました。石井さんは入江塾の出身です。ラサール高校に受かった時、直接进入江先生にお礼に行くのと先客がありました。どうも漏れてくる声に元気がないので、普通、受かった生徒は直接御礼を言いに来て、落ちた生徒は入江先生が怖いから電話で済ませてしまうのですが、その生徒は「先生にあんなに一生懸命教えてもらったのに、落ちてしまっただけで申し訳ありませんでした」と直接謝りに来ていたのです。すると、あの鬼のように怖かった入江先生が言ったそうです。

「気にしないでいいぞ。受験なんて落ちたって大したことではないんだ。人生は甘くないとよく言うが、あれは嘘だ。実は大甘なんだ。やる気さえあれば、何度でもやり直せるんだ。受験に落ちたことなんか屁でもないぞ」

これを聞いて石井さんは、怖かった入江先生のこと



大好きになったそうです。日達上人の「あきらめなければなんとかなる」に通ずる話だと思えます。

この度、日達上人第十三回忌御報恩浄業として、御法話集『大白牛車』を発刊しました。副題が「堪忍読本」です。たくさんの堪忍のお話がおさめられています。冒頭、御開山上人の最期の御詠「腹立つな物を苦にせず感謝せよ天の恵みに福德を増す」が示され、そして「このお歌は堪忍をしよう、我慢をしようということではありません。これは感謝をしようということをおしやるのです。身の回りのすべてのことに感謝できるようにになると、腹の立つようなことは一切なくなりますよ」と日達上人は解説しておられます。確かに感謝のできる人は自ずと堪忍もできると思えます。私達が一番感謝しなければいけないことは、命をいただいていることだ



とおも  
と思ひます。これほどありがたいことはほかにありません。

いま  
今から250年程前、イマヌエル・カントという大哲  
がくしや  
学者がドイツにいました。フランスのルネ・デカルトと  
なら  
並び称される人です。カントは生まれつき病弱で体の小  
さい人でした。脈拍がいつも120もあったそうです。  
絶えず動悸があり、喘息も患っていたので、いつも呼吸  
がゼーゼーとなり「苦しい。辛い」という言葉が口ぐせ  
のようになっています。両親や兄弟はそれを聞いて、  
どうにかしてやりたいと思うのですが、お父さんは貧し  
い馬具職人で、お医者さんにかからせることができません  
でした。初めてお医者さんに診てもらったのが17歳の  
時でした。17歳なのにカントは身長が150センチしか  
ありませんでした。胸が非常に薄く、とてもやせていま



した。カントがお医者さんにかかることができたのは、  
当時、貧しい人達のために巡回してくるお医者さんがい  
たからです。そのお医者さんはカントを診て言いました。  
「これでは確かに苦しかりう。辛かりう。しかし残念だ  
が今の医学では治すことはできない。しかし、君の心は  
病んではないだろ。命があることに感謝して生きてい  
きなさい。そして君が『苦しい。辛い』と言うと、君の  
お父さん（お母さんはすでに亡くなっていました）や兄  
弟はもつと辛くなる。だから、そのような言葉を我慢し  
なさい。逆に苦しい時ほど無理をしても笑顔で過こし  
なさい」

17歳のカントは、その言葉を聞いてその通りだと素直  
に思ったのです。いつも自分が「苦しい。辛い」と言  
っているのは、確かに周りの人は辛いだろう。これからは  
そういう言葉を口にするのはやめよう。笑顔で過こそう。



もう今日限り絶対に愚痴は言わない」と誓ったのです。

それからカントは、自分はいままで生きられるかわからない。だから、とにかく人の何倍も勉強しなければ、  
と思ひ、努力の結果、名門のケーニヒスベルク大学に入  
学しました。大学を出て教授になり、ついには総長にな  
り、大哲学者と言われる人になるわけです。

カントは散歩が日課でした。散歩の時間が非常に正確  
で、カントが歩いているのを見て、近所の人々が時計の針  
を直したというぐらい正確に歩いたそうです。これには  
規則正しい生活をして健康を管理しよう、という目的  
があったそうです。

また余談ですが、若い頃に読んだ渡部昇一先生の『知  
的生涯の方法』の中にカントの話が出ていました。カン  
トは一日一食、昼食のみだったそうです。毎日大勢の客



と一緒にワインを飲みながら、長い時には5時間ぐらい会食をしたそうです。カントはとても社交的で、また座談の名手でした。そのおもしろい話を聞くために実業家や貴婦人達が我を争って訪問したのです。カントの方はいろいろな人からさまざまな話を聞き、自己の思想の栄養としていました。会食後は毎日一時間散歩をし、思索に耽り、ときに重要な思いつきを手帳に書きつけたということです。

カントは大事なことを証明しました。当時、人間は一つの機械のように思われていました。要するに、心は横に置いておいて、人間は生命のある機械のようなものだと思います。それに対してカントは言いました。

「それは違う。人間は心だ。いつ死ぬかわからないような子どもが70歳を過ぎても健康に生きることができた」



カントは生涯、大病をすることがなかったそうです。  
この元は心にありました。心の持ちようが何より大事な  
のです。  
日達上人の言われるところの、感謝の心で生きる、と  
いうことです。

